



飛行機上から見た沼津大火

— 朝日 —

宮川特派員撮影 中島飛行士操縦

A remarkable aerial photograph of the great Numazu fire as taken from the Asahi plane on 11th.

大正15年12月の沼津大火を記録した写真 飛行機上空から見た沼津大火 十一日號 宮川特派員撮影 中島飛行士操縦 アサヒグラフ

大正時代に沼津市街地は2度にわたる大火に見舞われています。大正2年3月3日の大火の被害状況は絵葉書写真に残されています。

しかしながら、大正15年12月の被害状況については新聞記者の石塚恭江の発行した『灰燼の沼津と復興』に収録されている写真にわずかに残されているだけです。

飛行機から火災発生の翌朝に撮影された写真が残されていました。朝日新聞社発行の『アサヒグラフ』、大正15年12月22日付けの通巻第163号です。

『灰燼の沼津と復興』や『静岡民友新聞』の記事によれば10日の午後11時40分末広町の空き家から出火した火災は、南西の烈風にあおられて北に向かって燃え広がり、八幡町は全くの火の海となった。女子部小学校は一部焼失、さらに東西に燃え広がり、男子部小学校は難をようやく逃れた。本通りに向い延焼、市役所、室賀病院、堀内石炭部、駿豆肥料に延焼した。上本通から火の手は左右に分かれ一方は町方町に向い、一方

は片端町から改称された本通りを焼き尽くした。

さらに追手町の2か所に飛び火し、城内一帯は火の海となり、安全と見られた五藤松にも飛び火し、新築したばかりの楠病院や森永製菓、日本製氷などの大きな建物を焼き尽くした。

追手町では、山本旅館、お大富旅館、松風軒、繭取り引き所、旧郡役所は焼け落ち、市役所や警察署・郵便局は1時間も後に延焼した。岳陽運送店から山本旅館そして松風軒に移った火は鉄道官舎から下りホーム、そして鉄道施設や蓮光寺裏にまで避難移動した貨物満載の貨車十数両までも焼失したとある。

写真には延焼中の森永製菓や日本製氷と見られる建物が煙に包まれているのが写されている。おそらく貨車も延焼中とみられる。その南側一帯はほぼ焼け尽くされており、中央の沼津駅の下り線ホームも延焼が及んだのがわかる。ホームの北側には扇型の蒸気機関車庫や3棟が並ぶ電気機関車庫が残されている。左下隅には沼津駅の主要建物が類焼を免れて残されている。

右端中央には蓮光寺本堂が写っており、猪川の谷の東側の高台の前で延焼がくい止められている。

駿河湾の漁

川口 洋司さんの漁話
川口組の巾着網 (旋網) 漁…その2

今号は前々号(242号)に続いて川口組でおこなっていた巾着網漁のお話です。

●アジ・サバを捕る巾着網漁

アジ・サバを捕る巾着網漁は、カタクチイワシを捕る巾着網漁と同様、夜間に集魚灯で魚を集めて捕らえる漁になります。アジとサバ、違う魚種ですが、魚群としては混ざった状態であることが多く、巾着網でまとめて捕らえることとなります。漁場は石花海(石花海については資料館だより234号参照)になります。石花海にはニヤノセとウラノセがありますが、獅子浜から近いウラノセを主な漁場としていました。

船団構成はカタクチイワシを捕る巾着網漁と同様にアミフネ(網船)2艘、タンサクセン(探索船)2艘、ヒブネ(灯船)2艘となります。タンサクセン1艘とヒブネ1艘で組となり、それぞれの組が漁を行う2艘のアミフネに先行して魚群を探しに行く点も同様です。

主に沿岸を漁場とするカタクチイワシの巾着網漁では夕方ごろから出漁しますが、アジ・サバの場合、漁場となるウラノセまで当時の船で片道3時間ほどかかるため、なるべく日が落ちる前…周囲の状況を目視で確認できる頃までには現地に着くよう、正午過ぎには乗組員が集合して出漁します。

漁法もカタクチイワシの巾着網漁と同様です。タンサクセンに装備した魚群探知機で魚群を見つけます。2艘のアミフネを呼びよせ、ヒブネに装備した集魚灯で魚を集め、アミフネに積んだ巾着網で魚群を取り囲みます。

巾着網を曳き揚げて、取り囲んだ魚群の範囲を狭めていき、アミフネの横にタンサクセンをつけます。アミフネにはウインチが装備されており、ウインチにはタモ網がつけられています。このタモ網を巾着網に入れて魚をすくい、タンサクセンのカメ(魚艙)へ魚を移していきます。アジ・サバは鮮魚として魚市場で競りにかけられるため、生餌となるカタクチイワシとは違って活かしておく必要がありません。そのため、カメには水を入れておき、氷締めにした状態で運搬します。アジ・サバの巾着網は一晩で3~4回繰り返されますが、2艘のタンサクセンのカメがいっぱいになると2艘のヒブネのカメへ、それもいっぱいになるとアミフネのカメへと入れていきます。そして、沼津港の魚市場でセリが始まる時間より前には沼津港に着くように漁を終えます。

カメの中にはアジ・サバが混ざった状態になっており、このままではセリにかけてもいい値がつかえません。

そのため、魚市場では仕分けの作業が必要になります。仕分けは魚を運搬したタンサクセンの漁師が行いますが、漁獲量が多い場合は漁を中止してアミフネの乗組員を仕分けに加えることもあります。また、家で帰りを待つ女性たちにも午前3時頃に仕分けの手伝い要請の電話を入れて魚市場に集めます。魚市場では魚種や大きさによって仕分けをしてセリに出します。

●カツオ・マグロを捕る巾着網漁

カツオ・マグロを捕る巾着網漁は、カツオやキワダマグロ、メジ(クロマグロの幼魚)といった中型魚を捕るための漁です。日中に行う漁のため、他の巾着網漁とは異なります。集魚灯を灯すヒブネは必要ないため、ヒブネだった船はタンサクセンに役を代えて参加します。船団構成はアミフネ2艘、タンサクセン4艘に運搬船1艘が加わり7艘になります。

漁場は石花海や下田沖になります。夜明けに漁場に到着して漁を始められるよう、深夜に出漁します。

カツオ・マグロは海の中層にいるアジ・サバと違い、群れをなして上層を勢いよく泳いでいます。そのため、魚群探知機は使わず、目視によって魚群を見つけます。目印はカモメの群れです。カモメが水面に突っ込んでいく様子を確認できれば、上層に魚群がある証拠となり、アミフネを呼んで漁の準備を行います。

カツオ・マグロは非常に泳ぎの速い魚です。魚群の後ろから巾着網で巻こうとしても追いつくことはできないため、魚群の進行方向で待ち構えて巾着網を巻いていくこととなります。タンサクセンはカツオ・マグロを足止めするためにイワシなどの生餌を投げ入れ、餌に食いついている間にアミフネは位置取りを行い、魚群に対して巾着網を取り囲んで捕らえます。

一日に2~3回の巾着網漁を繰り返し、日が暮れるとその日の漁を終え、漁獲があれば水揚げをするために沼津港へと向かいます。

(話：川口洋司氏 昭和17年生まれ 沼津市獅子浜在住)



写真：川口組のカツオ・マグロ巾着網漁
川口安和氏写真提供

『ふるさと沼津覚書』

加藤 雅功

すでに「香貫・我入道編」として13回に渡って記した郷土の歴史地理シリーズの新たなスタートである。

それでは前回と同様に「歴史の玉手箱」を早速紐解こう。地域の「生活の舞台」、地形・地質や災害、集落の特徴や生業、さらにはランドマーク（陸標）や社寺、歴史や伝承、地名説話などに触れて行くこととする。都市化は大きく進んでいるが、大変魅力に富む地域であり、新たな視点で再発見の旅に出て行こう。

■大岡・金岡編 その1 地区名称の起源

地域の外観について最初触れるよりも前に、「地区名の起源」を端緒としたい。異なる以上に共通する部分が、二つの地域に隠れていると思われるからである。

●大岡と大岡庄 地名の語源として少し遡り過ぎるが、古代地名の「おほをか」（大岡）から紐解くこととする。古代の承平年間(931～938)に成立した百科辞書である『和名類聚抄』には、広く国郡郷の地名関係も触れられている。特にこの『和名抄』では日本語としての読み方を万葉仮名で示しており、掲載された中には山城国葛野(加度乃)郡大岡(於保乎加)郷ほか多数が存在する。

オホは美称、あるいは何か重要な性格を持ったというニュアンスを表す語で、微妙な意味合いや差異を示す。ヲカは「岡」で、丘陵地あるいは微高地を呼んだか。また海に対して「陸」をヲカとも呼ぶ。今日では一般に「大きな丘・岡」の意で解釈される。

参考として東京都目黒区南端の地、「大岡山」の例を挙げる。江戸期の衾村の地であり、小地名「平根」の区域だが、地名の由来は伝えていない。荏原台(下末吉面)の小台地、「岡」の起伏が多い所である。浸食谷の背後に当たり、旧村名はフセマ(伏間)の転化か。ヒラは傾斜地を指し、ネは峰・岡を意味する。

当地の沼津でも愛鷹山麓の地形の傾斜地や黄瀬川扇状地に共通しており、中世の荘園名として「大岡庄」や「大岡牧」の名称が見られる。中世文書からは平町の日枝神社付近や岡宮浅間神社辺り、北部では裾野市ももその桃園付近まで荘域が広がり、沼津市大岡・岡宮など主に黄瀬川以西がその中心である。

近代に入っては「町村制施行」以前の明治7年(1874)、いち早く8村が合併して新しい村づくりを開始している。中世の大岡庄の名称にあやかって「大岡村」と呼称することになった。前年に上小林・下小林から改名した北小林・南小林的ほか、上石田・中石田・下石田・高田・日吉・黄瀬川(木瀬川)の村々である。

機運が高まる以前の広域合併であり、発足当時の「大岡村」を大字として地番設定したため、旧来の村名は大字として残らなくなってしまい、ただ通称名として残るに過ぎなかった。大岡村は昭和19年に沼津市に併

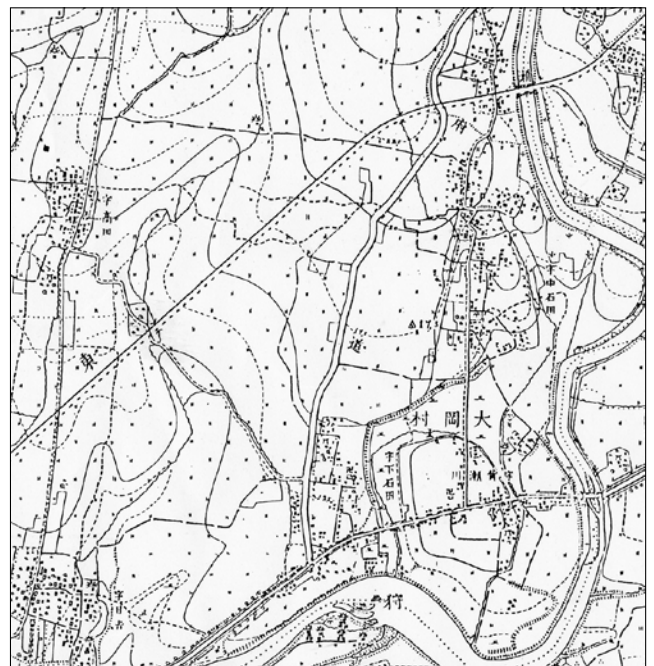
合されるが、旧大岡村はそのまま沼津市の大字「大岡」として残り、今日に至っている。

●金岡は合成地名 明治22年(1889)の「町村制施行」の際に、旧金持庄内の4ケ村と旧大岡庄内の4ケ村が合併して、中世の金持庄の「金」と大岡庄の「岡」の2文字を取り入れて、新生の「金岡」の村名が誕生した。このような命名方法は日本各地で実施され、地名や村名の統廃合が進んでいる。

地域的には岡一色・岡宮・東熊堂・西熊堂が大岡庄に属し、東沢田・中沢田・西沢田・沢田新田が金持庄に属していた。これらの村々は愛鷹山麓の緩傾斜地末端、山の根を指す「根方」沿いに立地する自然発生的な集落と新田村の沢田新田から成る。これら8ケ村の中央部の東熊堂には村役場が設置されている。それぞれの村は金岡村の大字となり、昭和19年に沼津市へ併合後も大字が引き継がれて現在に至っている。

金岡地区は東側に大岡地区、西側に愛鷹地区の両者の間に挟まれて位置する。これらは「根方道」、通称「根方街道」に沿って形成された中世以降の塊村に特徴がある。背後の丘陵性の台地、愛鷹火山山麓緩斜面に対して、乏水地域へと畑地開墾が進められたほか、前面の沖積地では古代から灌漑が進められていた。

なお中世の「金持庄」の荘園名についてであるが、市街地北部の「沢田郷」の地に中核が存在し、市街地南部から函南町日守に至る、広域の荘園が形成されていたことが中世文書から知られる。ただしカナモチに関して、地名の由来が判然としない。カナチ・カナジなどから語源的には香貫(カヌキ)の地に共通するものか、また開墾に絡むカノー・カノウと何らかの関係するものか。



陸地測量部2万分の1地形図 沼津近傍 明治20年

『一枚の絵葉書から』

この絵葉書は、宛て名面の通信欄が下部1/3のもので、明治40年（1907）から大正7年（1918）にかけて発行されたと考えられるものです。

現在の大手町交差点から北方向、JR沼津駅の方向を望んだものです。右側は大正2年（1913）の大火後に下本町から新築移転した沼津郵便局です。左側は同じく大火後に北側から新築移転した沼津警察署で、建物の横に火の見櫓が立っています。遠方には一般用と皇室用の2か所の出入口が隣接して設けられた沼津駅舎が見えます。

すでに駅前通りは大火後の街路整備で拡幅されていますが、旧国道一号線になる東西の通りはまだ整備が進んでいないようです。

沼津駅舎は大正2年の大火で焼失したとも言われていますが、画像を見る限り焼失は免れているようです。郵便局の建物の奥に小さく路面電車が写っています。御殿場回りの東海道線の沼津駅前と豆相鉄道の六反田《広小路、後に三島町駅（田町駅）まで延長》を結ぶ駿豆電気鉄道の路面電車は、明治39年（1906）に開通しました。

この路面電車は、旧東海道を走行していたが、旧沼津城内に入ると本丸を迂回するように北から西に向い、さらに駅前通りに出て、北上していました。大火後の道路整備に伴って新設された沼津城本丸を横断する旧国道一号線を大手町交差点まで走り、そこから駅前通りを北上する路線に変わりました。この写真は旧国道一号線が整備途中で、電車の線路が新築移転した沼津郵便局の北側を走行していたことを示す貴重な写真です。

この警察署も郵便局も大正15年の大火で再び焼失し、ここから移転することになりました。



絵葉書 沼津追手町二丁目（沼津蘭契社発行）

資料館からのお知らせ

開館50周年記念特別展の開催

開館50周年を記念する特別展『れきみんのおたから』展を現在開催しています。

開館以来50年にわたる博物館活動の中で寄贈・寄託などにより当館に収蔵されている資料の中から、今まで全く公開されていなかったり、展示の機会が少なかった資料を主体に、国・県・市の文化財指定を受けているものなど、貴重な資料を公開展示するものです。

なお、絵画などの劣化防止のため、会期を前後2回に分けて、展示物の一部の入れ替えを行います。



特別展の展示状況

歴民講座の開催について

本年度は2回の開催ができることとなりました。すでに第1回は10月19日に開催済みです。講師は柴裕之さんで、演題は「大御所家康と駿東」でした。大御所となった家康が駿府を居城として二元政治を行っていた時期の駿東との関わりについてお話いただきました。

第2回は1月18日に平山優先生に「武田氏の河東支配と興國寺城代曾根昌世」と題して講演いただく予定です。新出の史料の紹介を兼ねて、武田氏の河東地域の支配の様子や曾根昌世の足取りを追います。

沼津市歴史民俗資料館だより

2024.12.25発行 Vol.49 No.3（通巻244号）

編集・発行 〒410-0822 沼津市下香貫島郷2802-1

沼津御用邸記念公園内

沼津市歴史民俗資料館 TEL 055-932-6266

FAX 055-934-2436

URL:<https://www.city.numazu.shizuoka.jp/kurashi/shisetsu/rekishiminzoku/index.htm>

E-mail:cul-rekimin@city.numazu.lg.jp